KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

「他者と協働する力（チームワーク力）」を育てる初年次教育の試み：2018年度フレッシュマン・プロジェクトの授業を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2020-03-21 キーワード (Ja): 他者と協働する力, 自己理解, 他者理解, アナログ的手法, PDCA キーワード (En): 作成者: 日木, くるみ メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007922

関西外国語大学 研究論集 第111号（2020年３月）
Journal of Inquiry and Research, No.111（March 2020）

「他者と協働する力（チームワーク力）」を育てる初年次教育の試み

── 2018年度フレッシュマン・プロジェクトの授業を通して ──

日　木　くるみ

要　旨

激変を迎えつつある社会において、学生たちに求められている力の１つに「他者と協働する力」がある。他者と協働して働くためには、自己理解と他者理解を深め、他者とのよりよい関わり方を学んでいく必要がある。その力を大学初年次教育から育成することは、学生が今後の社会でより良く生きるために重要なことであると考える。

本稿は、英語国際学部１年生の秋に履修するフレッシュマン・プロジェクトにおいて、「他者と協働する力」を育成するために行ったチームプレゼンテーションの教育報告である。模造紙や寸劇を使ったアナログ的手法、PDCAの導入、教員と学生間の対話、学生間の対話が、学生の自己理解や他者理解を深め、「他者と協働する力」を育み、「やり抜く力」も身に付ける方法となりうることを示していきたい。

キーワード：他者と協働する力、自己理解、他者理解、アナログ的手法、PDCA

１．はじめに

AI が様々な分野に浸透し、進化を続けている。自動運転を可能にし、医療では病気の診断や手術、災害対策では最適な避難ルートの確保、ビジネスでは無人店舗や接客、人事では AI が採用の手助けをする。その他にも、レンブラント風の絵を描いたり、漫画、物語の作成などにも挑戦している。言語の分野では自動翻訳が進化し、マイクロソフトの「AI 女子高生りんな」と LINE で会話ができるなど、人間との会話までいかなくとも、その進化には目を見張るものがある。このような変化の中で、既存の仕事が消滅する代わりに新しい仕事が創出されるとポジテイブに主張する者もあれば、今後発展する企業は従来の製造業とは違い、雇用を生み出さないとネガティブに主張する者もある。このように意見がわかれるのは、専門家であっても、私たちの社会がどうなるかについて見定めるのは難しいということなのだろう。激変を迎えつつある社会の中で生き抜くために必要な力とは何なのであろうか。大学を卒業した学生たちが、大学を出たことの意味を感じられるために、大学ではどのような力をつける教育をしていくべきなのだろうか。

英語国際学部では、2014年以降、1年生がフレッシュマン・セミナー（春学期）とフレッシュマン・プロジェクト（秋学期）を必修科目として履修することになっている。その目的は、学生が今後社会で必要とされる力をつけることだと理解している。特に、秋学期のフレッシュマン・プロジェクトでは、学生が5、6人で1グループをつくり、グループ発表を行っている。指導する中で、いくつかの課題が明確になってきた。これらの課題の解決に少しでも近づきたいという思いで工夫を続けているが、2018年秋学期のフレッシュマン・プロジェクトの授業では、学生が一定の評価をしてくれたし、担当する私自身も学生が人として成長しているという手ごたえを感じた。学生にとっては決して易しい授業ではなかったと思うのだが、行った活動の中で何が良かったのか、反省点は何か、今後改善するために何をすべきなのか、などを考察してみたい。

2．フレッシュマン・プロジェクトの授業研究

2.1 フレッシュマン・プロジェクトの目標、内容、期間、課題

フレッシュマン・プロジェクトの主な活動内容は、グループでプレゼンテーションなどを行うことである。その到達目標は、以下の3つである。

(1) チームワーク力、構想力、論理的思考力、課題解決力等を発揮しながら、説得力のあるプレゼンテーションを行うことができる。
(2) 現代社会をめぐる基本的な問題について分析し、議論することができる。
(3) キャリア形成の基礎を学び、グルーバル・キャリア基礎力の基盤を確立する。

この中でも(1)の目標を最重要目標と定めて授業研究を行った。

発表の内容は担当教員によって多岐にわたるが、私が担当する授業では、「社会に良い影響を与えた人、偉業を成し遂げた人」を選び、偉業を成し遂げた理由と方法などを分析する内容とした。この内容を選んだ理由は、学生たちが先達から成功に導く考え方や行動を学び、今後の人生に活かしてほしいという願いからである。授業は週1回で全14回だった。準備期間は4月から6月までの約3ヵ月間で、7月に発表する。発表では、それぞれ5、6人からなる5つのグループがそれぞれ15分間の発表をした。準備期間中、学生は各グループ内で話し合い、計画を立てて準備していかなければならない。

フレッシュマン・プロジェクトでグループ発表指導を5年間行う中で、大きな課題として以下のようなことが見えてきた。

課題１　学生が自ら主体的に動かないことが多々ある。

課題２　学生がチームでより良く協働する方法がわからない。

課題３　学生が自ら計画を立て実践し、必要があれば計画を修正することがうまくできない。(PDCA をうまく実行できない。)

課題１に関しては、授業内の話し合いをする際に、全員ではないが、グループのメンバー同士が主体的に話し合わないことがあった。お互いに黙ってしまって、議論がすすまない。お互いに話し合わなければ、授業に参加する意味もなく、参加している本人たちも面白くないと推察される。何を話したらよいかわからない、自分の意見に自信がないため発言できないということもあるようだ。学生のやる気も関係しているかもしれない。経験的に、良い発表をするグループは、全員が発言し、その雰囲気も明るく暖かいと感じる。多くのグループがやる気を持って良い雰囲気で準備ができるような指導が必要だった。

課題２では、いくつかのケースが見られた。１つには、やる気のある特定の学生が中心となり、他のメンバーも自分の頭で考えずにその学生に依存しきってしまうケースがあった。これではせっかくいるメンバーの力を生かしきれないし、１人または数人の学生に負担がかかりすぎてしまう。また、やる気のない学生が準備に参加しないケースや、そういう学生に対し他のメンバーが何のアプローチもしないケースも散見された。他者をうまく巻き込み、仕事をするのは一筋縄ではいかないことではあるが、何らかの方策をとって改善できないかと思った。

課題３に関し授業で気づいたことは、多くの学生が PDCA を行えないということである。グループで良い発表をするためには、互いに良く話し合い、計画を立てて (Plan) 実行し (Do)、実行したことを評価 (Check) した上で、改善 (Action) していかなければならない。この PDCA をうまく回し、継続的に発表の質を高めることが求められると思うが、実際には、学生が計画を立てても立てっぱなしで準備をおろそかにしたまま時間だけが過ぎていき、最後の１、２週間で大慌てをして苦しみながら準備するということが少なくなかった。今までの学校生活や部活で、PDCA を意識して生活する経験が不足しているのかもしれない。教員側から積極的に働きかけて、PDCA を意識させる大切さを感じた。

上記３つの課題を克服することは、この授業である目標 (1) の中の、特に「チームワーク力、課題解決力」を育成する方法につながると考える。AI がどんなに社会に浸透しようとも、人間に求められる能力の１つに、他者とコミュニケーションを取り協働を進める力があるという(2018中山、2018新井)。「他者とコミュニケーションを取り協働を進める力」は、「チームワーク力」とも捉えられ、これは AI がなかなか到達できない能力のようだ。激変する AI 時代の中で、他者と協働する能力を育み、主体的に PDCA を行って問題解決をしていく力をつけることが、教育に求められているのではないだろうか。そんな思いの中で、2018年の秋学期のフレッシュ

マン・プロジェクトに取り組んだ。

2.2. 授業研究：2018年秋学期のフレッシュマン・プロジェクト

9/14から12/21までの全授業14回のうち、最後の３回分を発表にあてた。履修者は27名で、６人からなるグループ２つと５人からなるグループ３つの合計５グループを作り、グループ単位で活動した。

発表方法は Power Point などは使わず、模造紙や劇などを入れるように指示した。アナログ的手法を使った発表を採用した理由は、「他者とコミュニケーションを取り協働を進める力」を育てるためには、仲間同士で実際に会って何回も話し合いを重ねる「模造紙による発表」がふさわしいと考えたからである。模造紙を使った発表では、ミニチュアの視覚資料などを使ってリハーサルを何回も行ない、発表内容の順番、１人が話している間に他の誰がどの視覚資料をホワイトボードに貼るか、視覚資料の色・形・サイズなども詳しく決めておかないとうまくいかない。あえてアナログ的手法を使うことで、仲間同士で頻繁に会って話し合う機会を増やすことができると考えた。

最近は学生が便利な SNS でやりとりすることが多く、会って話し合う機会が少ないようだ。学生の発表準備を見ていると、担当パートを決め、メンバーと相談することなく個別に作ってきて、誰かがそれを１つにまとめるだけのこともある。それでは、他者と協働する力はつきにくい。実際にあって話し合い、皆で目標・情報・時間を共有してこそ、他者と協働する方法を体得できると思う。Power Point などを使った発表も、利便性が高いなど良い点が多々ある。しかし、この初年次のフレッシュマン・プロジェクトでしっかりと「他者とコミュニケーションを取り協働を進める力」を育み、その後 PBL をはじめ、他の授業で Power Point などを使う経験をしてもらえば良いと考えた。

今回の授業研究の目的は、前述の３課題への授業内外での対策を試みることであった。では、9/14から11/30の期間、どのように指導を進めたか、その意図は何であったか、よかった点、反省点などを時系列的に2.2.1から2.2.5で説明していこうと思う。

2.2.1 第１回目の授業 (9/14)

最初の授業では次の３点を行った。1. チームで協働する困難さに向かう気構えを持つ、2. PDCA をまわしやすい状況を作る（課題３への試み）、3. 学生に主体的に目標、ルールを立ててもらう、（課題１への試み）である。

まず、授業の目的や内容、評価方法などを説明した。その後、去年の１年生が発表を終えたのち、後輩に向けて書いたアドバイスを読み上げた。また、学生時代にこのような発表を経験した卒業生（社会人の先輩）に、話をしてもらったりもした。これらは、チームで協働する困

難さに向かう気構えを持ってもらうためであった。

次に、各グループに発表内容・グループ目標・ルールを話し合って決め、授業が終わるまでに「ミーティングの記録」という用紙に書いて提出するよう伝えた。この「ミーティングの記録」には、グループ内で話し合った内容と決定事項などを書いてもらい、授業の終わりに毎回提出するようにさせた。これは、自分たちが今どのプロセスにいて、何が決まって何が決まっていないのかを意識させ、今何をすべきか、今後何を考えるべきかを常に考えてもらうためであった。書くことでPDCAの感覚が少しでも身につけばという意図であった。

発表内容については、テーマとする人物を決めやすいように、春学期のフレッシュマン・セミナーの授業課題であるレポートにリンクさせ、ある程度事前に調べさせていた。グループの目標とルールは、1つでも複数でもよいとした。このように、学生自身に発表内容、目標、ルールを決めてもらった理由は、課題1の主体性を引き出すためであった。英語国際学部では、2年生で教育課程上の留学があるため、かなりタイトな時間割で授業を履修する。留学に行くためにはある程度の成績もとらなければならない。そんな中でグループ発表をするので、学生が課題をやらなければという義務感や、やらされているという受け身の姿勢で取り組んでいると感じることが多々あった。自分達で主体的に決めたことに対しては、やる気を出すし、納得感も持つと考える。課題に対し、義務的・受動的な姿勢で臨むのではなく、課題に対し主体的・能動的に取り組んでもらうための工夫であった。

各グループが提出したものをまとめたものが表1である。これにグループのメンバー氏名を付け加え、第2回の授業で学生全員に配布した。個人情報となるため、表1では学生の氏名を削除している。

発表内容では、グループ2とグループ3が同じ人物を扱うことになったが、同じ対象でもグループによって分析が異なるだろうと思い、そのままにした。目標に関しては、発表の日から逆算して計画を立てるように伝えた。グループ2やグループ5は抽象的な表現の目標だったが、自分達で決めた目標だという認識を持ってもらうために、特にコメントせず、そのままとした。今後は目標を立てる前に、具体的に目標を立てることの大切さを伝えたり、過去の計画などを見せて具体的な目標を立てさせていくことが必要だと思った。

目標やルールなど、何もないところから話し合うのは難しいだろうと思い、いくつか簡単な例は出したが、学生が決めたルールなどを見ると、それぞれのグループがしっかり考えている印象を受けた。

表１：各グループの発表内容・グループ目標・ルール

（発表日）	発表内容	目標	ルール
グループ１ （12/7）	（青学） 原監督	● 全員の知識が同じになるようにする。 ● 意見が対立してもお互いが納得するまで話し合う。 ● 他人に任せず協力する。	● しっかり連絡を取り合う。 ● 休む時はグループに報告する。 ● 定期的に集まる。
グループ２ （12/7）	羽生結弓	楽しんでみんなが納得、充実感！！	● さぼらない。（休む時はLineで報告） ● 積極的に発言
グループ３ （12/14）	稲盛和夫	● 聞いている人が理解しやすい発表にする。 ● 自分たちも納得できるようにする。	● 休む時は前日までにチームに連絡する。 ● 課題と期限を決めて、期限の日に会って、内容をまとめる。
グループ４ （12/14）	稲盛和夫	● 聞き手をしっかり引き込んで飽きさせない。	● 休む人はグループに必ず理由付きで連絡。 ● 週２回集まる。 ● 集まったとき、全員必ず１回は自分の意見をいう。
グループ５ （12/14 12/21になる可能性もある）	内村航平	目指せ、グループ１の発表。 （仲良さ、内容、元気）	● ぐだらない。（集まった日はプレゼンの話をする、意見を出す） ● 集まった日に目標を立てて、その目標を達成する。 ● 金曜日の放課後と月曜日の昼休みに集まる。

2.2.2 第２回～第４回目の授業（9/21、9/28、10/5）

この期間中、学生たちは自分で立てた目標を達成するために、計画を立て、実行した（課題３への試み）。２回目の授業では、各グループに発表までの計画を立てて授業中に提出するように伝えた。初めてグループ発表をする学生も多いため、いつまでに何を終わらせたらよいかなどについての知識は乏しい。そこで、教員側からペースメーカーとして、以下のような締め切り日を３つ示した。

① 10/12：イントロダクションのリハーサル（ミニチュアの視覚資料使用）
② 11/12：発表全体のリハーサル（ミニチュアの視覚資料使用）
③ 11/16（グループ１と２）、11/23（グループ３と４）、11/30（グループ５）：本番同様のリハーサル（模造紙の視覚資料使用）

３つめの締切が３日間あるのは、５グループのリハーサルを最初から最後までコメントをしな

がら見るためには相当の時間が必要だったためである。締切日には教員に授業内でリハーサルを見せることにした。学生は以上の締め切りを考慮に入れて、発表までの計画を立てた。小さい３つの締切日を設定したことで、学生が口々に「意外に時間がない」と言っており、「のんびりできない」という雰囲気が漂った。私が期待する以上に、今後の準備の見通しを「見える化」できたようだった。

戸惑いながらも学生達は計画を立て、１つのグループを除いて４つのグループは授業時間内に提出した。3回目の授業で、各グループの計画表をまとめたものを学生に配布した。その折に、提出していないグループは、自分たちの計画が載っていないのを見て、急いで授業中に計画を立てて提出した。また、他のグループにも、模造紙を作り始める時期などの情報を入れたほうが良いなどのフィードバックを行い、修正してもらった。こうして３回目の授業で、修正済のグループの計画が出揃った。その計画をまとめたものを４回目の授業で配布した（付録資料）。

グループ全体の計画を示した意図は、常にPDCAを意識してもらうためであった。今、自分たちはプロセスのどの時期にいて、何ができていて何ができていないのか、これから何をしなければならないかなどを、他のグループを参考にしながら考えられるように「見える化」した。最終の計画表が出揃うまでに約３週間もかかったので、今後は、計画をもっと早い時期に立てられるようにしていくべきだと思う。

計画立案と同時並行して、発表の対象人物についての資料を読み、ミニチュアの視覚資料を使ったイントロダクション（３～５分）を作るように指導した。

2.2.3 第５回目から第７回目（10/12, 10/19, 11/2）

この期間中は、課題１から課題３の全てに対し同時に取り組んだ。中でも、課題２(チームで協働する方法がわからない）に対して試みる機会が多かった。5回目の授業で、ミニチュアの視覚資料を使って、イントロダクションのリハーサルを行った。ここでどのグループが遅れているか見えてきた。遅れているグループには、昼休みや空き時間に研究室に来て準備をしようと声をかけた。このころから、それぞれのグループの問題が顕在化してきた。例えば、メンバー間の意思疎通がうまくいかない、やる気に差がある、どのように進めていったらよいかわからない、教員や他者からのフィードバックを求めず自分たちだけの考えだけで進める、などである。授業内だけでは各グループの問題に対処できないため、授業外、特に昼休みを利用した。１年生は授業がかなりぎっしり入っており、空き時間に集まることが難しい。そこで、昼休みを利用して食事を取りながら話し合いをするようにした。授業外の集まりでは、協働する方法・工夫について話すことが多かった。その理由は、教員が個別の対応を丁寧にしていく中でこそ、学生が協働する方法・工夫を学んでいくことが多いという経験からであった。そして、個別の対応には通常、時間がかかるために、授業外の方がやりやすかった。

例えばあるグループでは、特定の学生がブレインとなってほとんどを一人で考え、メンバーの意見が出るのを待てない、他のメンバーも自分の頭で考えずにその学生に依存してしまう、ということがあった。中心となって考えている学生に話を聞いたり、他のメンバーの意見を聞くうちに、メンバー同士が互いにコミュニケーションをあまり取っていないため、誤解が生まれていることがわかってきた。中心となっている学生は、「自分で進めるほうが楽」だとか「他のメンバーが意見を出してくれない」という意見を持つ一方、依存している学生は「意見をだしても、聞いてくれない。」「自分に自信がなくて話せない」や「だんだん話し合いに行くのが嫌になる」などの意見を持っていた。メンバー間で意思疎通がうまくいっていないこともわかりつつ、何も手立てを講じない他のメンバーも多かった。そこで中心となっている学生には、仲間の意見をもっと聞いたり、「いいね、なるほど」などのポジティブなフィードバックをしたり、相手の意見を待ってはどうかと伝えた。グループのメンバーひとりひとり全員が大切で、皆で考えて準備をするからこそ、「私たちの発表」になるという考え方を持ってもらいたかった。自分の意見に自信が持てない学生には、そのままだと社会人になるときに苦労をするので、意見を言う勇気を持とうと励ました。また、他のメンバーに、うまくいっていないと感じた時になぜ介入しないかと聞いたところ、「中心的な学生は、しっかり準備をしてきているのに、自分たちはあまり準備をしていないので、後ろめたさから意見を言えない」という声が複数あった。そこで、そのグループが自分たちで立てた目標を読んで聞かせ、今のままでその目標が実現するのか質問した。罰の悪そうな顔をしていた学生も何人かいた。目標実現のために、自分たちができることは何かを考えてもらったところ、「自分たちもしっかり準備してくれれば意見をいえるし、問題があったときに言える」という意見に落ち着いた。その後、教員側も改善されている点を見た折、「よくなってきたね」と個人的またはグループ全体に対して声を掛けるように心がけた。それぞれが課題を抱えながらも、グループメンバー全員が集まって話し合うことが多くなっていった。

チームワークを成功させるためには、多様な意見がどんどん出てくるような状況になることは大切だと思う。そのためには、メンバーがある程度信頼しあっていないと、委縮して本音が出てこない。多様な意見が出てきたときに、メンバーひとりひとりがしっかりと受け止めて聞いていこうとする姿勢があると、かなり言いやすくなるし、自分の意見が通らなくても納得度が高くなる。この点を理解してもらう方法を模索していくことは今後の課題として残る。

他にも、学生のやる気に差がある問題がでてきた。準備に出てこないメンバーや遅れてくるメンバーがいたり、そのようなメンバーに他のメンバーが何も働きかけない、などの状況があった。メンバーからも「〇〇さんがいつも来ません」という意見を聞くことが増えてきた。そのようなときには、来れない理由を尋ねたかどうかを確認したが、ほとんどの場合、尋ねていなかった。この授業をとっている学生の中には、他のメンバーに無関心であり、うまく進めてい

くには自分の本音を言わないほうが良いとさえ考えているように思える者もいた。そこで、「みんなの発表なのに、大切なメンバーが欠席しており、その理由もわからないままでいいのか」と問いかけた。私は、他者との協働の大前提は、メンバーひとりひとりに対する暖かい関心だと考える。まず、怒らずに欠席理由を尋ね、その上で「大切なメンバーが欠席すると、メンバー間で情報量ややる気に差が出て困る」ということを丁寧に説明してはどうかと伝えた。一方で、来ない学生とは個人的に話し、来れない理由を聞いた。授業を休みがちな学生には複数の問題がある場合が多いので、個人的に話したほうが本音が出てきやすいだろうという配慮であった。結局、その学生は欠席が多いためにこの授業を落とすことになった。自分が不合格になるとわかっていながら、仲間が空き教室で練習しているのを手伝っている様子も何回か見かけた。仲間たちも、「〇〇さんは欠席が多いからこの授業は不合格になるとわかっているけれど、手伝ってくれています」と言うようになり、仲間の結びつきの妙を感じた。

すべてのグループに対して丁寧に対応できればよいのだが、教員側の時間的、能力的な限界があり、なかなかそうはいかなかった。質問をしない、またはリハーサルを見せないグループもいくつかあり、研究室に来るように声掛けはしたが、なかなか腰が重く、来ないグループもあった。その主な理由は、「先生にだめ出しされるのがいやだ、うっとうしい」という理由だったようだ。こちらがコメントを言うと、あからさまに不満そうな顔をする者もいたし、感情的になるものもいた。学生の中には、両親から一切怒られたことがない者もいる。教員は怒っているわけではなく、筋の通らない点に対して質問やコメントを言っているつもりであるが、自分という人間や自分の努力を否定されたように感じ、かなりストレスを感じる学生もいるようだ。このような気持ちは分からないわけではない。しかし、より良いものを作り上げていこうとするプロセスの中で、自分とは異なる意見に直面するときに、どのような姿勢でいると自分にとって学びにつながるかを考えてもらう機会にしなければならない。他者との協働には、互いの我慢が必要になる。私は、一貫して本音で質問、コメントを伝える姿勢でのぞんだ。ただ、コメントを言いすぎて学生がトラウマになってしまうと教育効果がなくなるので、相手の反応を見ながら、わかってもらえるような言い方などで工夫を続けた。何度経験してもこのプロセスは手探りで極めて難しく、清水の舞台から飛びおりるような気持ちで試すことも多い。

中には「とにかく最後まで聞いてください」という学生もいたが、社会に出たときに忙しい状況の中で、上司や先輩が最初から最後までいつも話を聞いてくれるとは限らない。その学生の準備を見ていると、フィードバックをもらいつつより良くしていこうという姿勢が見られず、自分（達）の考えを押しとおしたいという姿勢を感じたので、「あなたたちが努力して準備していることは理解している。しかし卒業後会社に入った時、忙しい業務の中で上司や先輩が常に、最初から最後まで丁寧に話を聞いてくれるかどうかわからない。今回の発表準備を経験者からフィードバックを聞く練習と考えてはどうか。」と問いかけた。その時には理解できなかっ

たようだ。しかし、発表が終わったときに、「先生に見せに行くことの大切さ」を後輩にあてた手紙に書いていたので、理解してくれたのではないかと思う。

準備段階で、教員に相談したりリハーサルを見せる理由がわからず、自分たちだけで進めてできたら良いと考える学生もいる。発表が終わるまでは、そのような学生に辛抱強く声をかけ続けていかなくてはならない。学生も教員のフィードバックを辛抱強く受け止めなければならない。学生の成長を促すためには、学生と教員双方の我慢が必要だと感じる。チームで議論や準備を進める際、教員や仲間はどのような姿勢でフィードバックを与えたらよいか、また、教員や仲間からのフィードバックをどのような姿勢で受け取ったら良いのか、などの点について、具体的な指導方法を考えていく必要性を感じる。

第７回目の授業ではミニチュアを使った通しリハーサルをする予定だったが、実際にリハーサルができたグループはなく、全体的に遅れ始めている状況だった。このあたりから、学生の疲れも見えはじめた。他の授業のクイズやレポートなどとも重なって、自分を律することが難しい学生もいたし、そんな中でも仲間を鼓舞して頑張っている学生もいた。教員も、個別の対応に追われ、PDCA の Check や Action の部分がおろそかになってしまったのは大きな反省点であった。毎回提出させる「ミーティングの記録」や全体の計画表などを使って、自分たちの進行状況を振り返って修正する機会を持つべきだった。

2.2.4 第８回目から第 11回目（11/9, 11/16, 11/23, 11/30）

2.2.3と同様、この期間でも３つの課題に対する試みを続けた。発表が近づくにつれ、学生たちは焦り、疲れ、時には感情的になる。そのような学生と我慢強く付き合う姿勢が、教員側に求められた。学生達自身が諦めない限り、こちらは最後まで付き合うという覚悟で臨んだ。11月半ばから特に最初の２つのグループへの指導をまめに見るようにした。過去の発表を見る限り、最初のグループの発表が良いと、あとに続くグループも負けまいと頑張る傾向がある。学生達は、同級生の前でよい発表をしたいのだ。このころになると、少しづつ空き教室を利用して、残るグループが出てきた。見てほしい時には呼んでほしいと言っていたが、なかなか呼びに来ない。そこで、こちらから練習している教室に行って様子をみた。

１年生の多くは、模造紙を使ったグループ発表の経験がない。彼らのリハーサル状況に共通しているのは、集まって話し合いばかりして、いつまでたってもリハーサルを始めないことだった。年々、この傾向は強まっている気がする。やってみておかしかったら変更すればよいだけのことを、原稿・視覚資料などが完璧にできてからでないと、リハーサルができないと思い込んでいるような節がある。要は、ポイントだけ抑えて、アドリブで説明をしながら視覚資料を貼っていくという練習を全員でどれだけ繰り返し行うかである。まさしく、主体的に他者と協働してこそのリハーサルである。とにかく学生がリハーサルのために動かないので、教員が最

初のイントロダクションの部分だけでも強制的にやらせた。ここら辺は、どうしても教員側の力技になる。最初は言葉が出てこなくて、泣く学生も出てくる。うまい言い回しや見せ方などを教員が助けて伝えながら、何回も同じところを繰り返しリハーサルすると、不思議なことに学生達にブレークスルーが起こることが多い。ほんの数時間前にだめだった発表が、しっかりしたものになってくるし、学生も自信を持ってくる。学生の脳内の神経がつながって、リハーサルの仕方を体得していくような感覚である。体得するまでの時間が年々長くなっているような気はするが、この学生の奇跡的な成長プロセスを見るのは何度体験しても感動する。

そのうち、全５グループが放課後の空き教室で練習をするようになっていった。実際に発表する教室と同じような教室だと、模造紙を張る位置や立ち位置などが確認できるので、必然的に空き教室でリハーサルをするようになった。あるグループが参考にしたいと他グループの練習を見にきたこともあった。客観的に他グループを見ると、いろいろと気づくこともあるようだ。発表前日にはまだ全部出来ていなかったのに、最後の追い込みでものすごい力を出してよい発表をするグループがあったりする。それを目の当たりにして、「あんなに昨日はできていなかったのに、ここまでもってきてすごい！」と感想を述べる学生もいた。私自身、こんな状態では発表は無理ではないかと思うこともあるが、若い学生が諦めずに最後の最後まで準備すると、驚くような発表になったりする。学生の持つ可能性には、いつも驚かされる。この時期は、多くの学生が夜遅くまで教室に残って頑張っていた。

2.2.5 第12回目から第14回目（12/7, 12/14, 12/21）の授業

この期間には、各グループの発表を行った。最初のグループ発表は、１年生にしては良い内容だった。その後に発表するグループに影響を与えたようで、多くのグループが遅くまで大学に残って準備をしていた。他のグループが良い発表をしているのに、自分たちのグループの発表の質が悪いとみじめだというプレッシャーもあったかもしれない。結果的に、どのグループも良い発表を行った。

全てのグループが発表を終えた日、教員から全体的なコメントとして、「今までの１年生の発表の中で一番良かった。勉強で頑張ったこととして人に語れるような頑張りをしてきたと思う。苦しいこともたくさんあったと思うけれど、みんな、最後までよく頑張りました。」というようなことを話したときに、自然発生的に学生から拍手が起こったのには驚いた。学生たちが、自分自身の頑張りを前向きに評価しているからこその反応だと思った。

３．授業に対する学生の評価と感想

今回の授業に対して学生がどのように評価したか、大学が行う授業評価と、学生たちが書い

た授業に対する感想の２点から見ていこうと思う。

まず、大学側が行った授業評価であるが、全体的な評価は以下のようだった。最初のローマ数字は授業評価の質問番号である。

IV-1 この授業によって、知的関心が高まり、学ぼうとする意欲がかき立てられた。　86.5%

IV-2 この授業を受けて、知識が深まり、能力を高めることができた。　88.5%

次に、課題に関係すると思われる評価ポイントであるが、課題１の学生が主体的に動いたかどうかについて、以下のような結果だった。

II-3 あなたは、この授業に積極的に参加したと思いますか。　85.4%

III-4 教員からの一方通行的な授業ばかりではなく、双方向的な授業であった。　83.3%

また、教員が学生の主体性をサポートしたかに関する評価については、以下のようであった。

III-5 授業中や授業外において、質問や相談ができるように配慮されていた。86.5%

全体に前向きな評価だったが、考慮すべき項目として、以下のような点があった。

III-7 授業を充実させるための手立てがなされていた。（該当する項目はすべて選択すること）

(8) 学生の発言や意見を引き出そうとする試み（質疑応答、話し合い、発表等）32%

(9)「やる気」を引き出すための学生に対する激励の言葉掛け　36%

この評価に関しては、今後の工夫が必要だと思った。担当教員は、学生が思考能力をつけるように多くの質問をし、やる気を出すように声かけをしてきたつもりであったが、学生たちから見たらまだまだのようである。学生へのサポート方法を今後工夫していく必要を感じる。

２点目の学生による自由記述の感想を見てみよう。全員が発表を終えた時点で、来年履修する１年生にそのまま見せることを前提として、後輩に向けて感想を書いて欲しいと伝え、無記名で書いてもらった。多かった意見の内容を見ると、大まかに３つの意見に集約できる。

一番多かったのは、「厳しかったけれど得るものがあった。」というコメントである。「しんどい、辛い、厳しい、大変、きつい」と記述したものは24名中19名の79.1% で、1年生にとってかなり厳しい授業であったことがわかる。その、厳しい授業だったと書いた19名中17名（全体の70.8%）は、最初はしんどいと思っていたものの、「成長できた、得られるものが多かった、学んだ、よい経験になった、最後はほんとに良かった、終わった後は達成感がすごい、意味があった」などと記述した。

具体的な意見をあげてみよう。

「秋学期にプレゼンテーションがあります。なめたらいけません。しょうみどうにかなると思っていたら、全然どうにもなりません。だからプレゼンが始まったらその日からプレゼンの準備を始めた方がいいと思います。先生はプレゼンのこととなるとガチです。私たちが社会に出たらそんなに甘くないと、心の底から熱心に指導をしてくれます。いやになっても逃

げないこと。怒られてもめげないこと。泣いてもいいからいいものが作れるようにがんばるコト。それを私はこの１年で学びました。１年生が終わったら、あの努力がムダじゃなかった。意味があったと思えます。」

課題１の主体性につながったかどうかは分からないが、多くの学生が後輩に向けて、「逃げないで、本気で取り組むこと」を奨励していた。

次に多かった意見は、課題２につながるチーム関連のものだった（24名中15名、62.5%）。その中で複数の学生が、チームワークがうまくいくように、後輩に具体的なアドバイスをしていた。

「常に思いやりを持つ。チームワークは本当に大事です。１人でも欠けると進むのが遅くなります。みんなでやると良い案が出るし早く進みます。同じ班の子で苦手な子がいてもうまくやれる方法がきっとあるので話し合いましょう。」

「チームワークを大事にしなさい。チーム全員の力や意見を使ってあげるべし。一人だけがつっぱしらない、まかせっきりにさせない !! これを守れば絶対に成功するはず !! 」

「また、グループで協力する時は必ず皆で相談し合って下さい。LINE グループも作ってこられなかった子にしっかりレンラクしてあげて下さい。」

「グループで何度も集まって話し合う。」

「もし、グループでプレゼンするとなったら、まず班の子たちと仲良くしましょう。そしてどんどん自分から意見を出しましょう。その時に、自分の意見だけでなく、他の子の意見も引き出して聞いて下さい。仲間同士で言い合えないことはとても辛いことです。」

「グループのメンバーに思いやりの心をもつこと」、「皆で話し合うこと」、「自分の意見を出し、相手の意見も聞くこと」など、チームでより良く協働する方法を具体的に伝えている。

以下のように、チームでの協働作業を通して自己分析を深めた学生もいたようだ。

「特に秋学期のプレゼンでは、いつも一緒に授業を受けていない人たちと一緒に１つのものを作りあげる過程でとても苦労しました。今まで誰にも言われたことがない自分の改善すべきところを指摘されてどうしたらいいのかわからなくなったこともありました。でもそれは自分を見つめ直すとてもよい機会で、それを自分なりに工夫して改善することで、少しは成長できたかなと思います。」

「私は、このフレッシュマン・プロジェクトという授業を通して、多くのことを学びました。今まで受けたことのないような授業で、最初はついていけませんでした。５人１組のグルー

プでプレゼンをするということがこれほど大変なことだとは思いませんでした。約３ヵ月間、時間と体力を使いまくりました。その中で、自分がどういう人間なのか客観的に見ることができました。グループの中で、１人で分かった気になって発言したり、聞いたりしていなかったのは間違っていました。個人戦じゃなくてチーム戦だから、支え合ってこそいいものができるんだと思います。チームのメンバーのことを頼る時は頼って、違うと思った時は話し合うことが大切です。終わった後は達成感がすごいので、是非頑張ってください！！」

また以下のように、準備が進むにつれてチームワークに対する感じ方が変わってきた学生もいる。

「プレゼンも、最初はみんな嫌々だったし、何を先生に見せても全部やりなおしで、このクラスになったことが嫌でした。でも、先生に何度も怒られて、自分たちでもたくさんあつまって、少しずつプレゼンの形が見えてくると、焦るし、やらないといけないこともはっきりみえてくるし。そんな状況の中でいつのまにかグループ、先生との集まりが嫌じゃなくなったし、むしろ授業のクラスの子よりフレマンで同じグループの子の方が仲良くなれたりして、楽しかったです。」

学生の意見を読むと、チームでプレゼンをすることは、よりよく良く協働するための方法を学べるだけでなく、自己理解や他者理解を深める場ともなり得る、という感想を強くもつ。

３番目に多い意見は、２番目の意見より１名少ないだけで（24名中14名、58.3%）、その内容は課題３につながる計画、準備に関連したものだった。意見の多くは、早く準備をはじめる大切さを述べていた。「時間があると思わず、計画的に進めて下さい。」とか「計画性は大事に！」などの記述だった。今回、PDCA について明示的に指導を行わなかったが、今後どのように導入していくかについて、検討する必要を感じる。

以上のような自由記述のまとめから、「学生が自ら主体的に動く大切さ」（課題１）、「学生がチームでより良く協働する方法」（課題２）、「学生が自ら計画を立て実践し、必要があれば計画を修正する大切さ」（課題３）に対し一定の理解をしてくれたのではないかと考える。

４．今回の授業の振り返りと今後の課題

最後に授業を振りかえって、今後も持続したい点と今後の課題をまとめたい。

今後も維持したい点としては以下の３点が挙げられる。

１）学生自身に目標、ルール、計画を自ら決めさせた点。

学生自身が何のためにこの活動をしているか悩んだ時に戻る原点ともなり、主体的に活動させ

る上で意味があったと思う。

２）中間目標（リハーサルを教員に見せるなど）をいくつかおき、時間に限りがあることを見える化した点。

これをすることで、ある程度の危機感を持って準備してもらえたと思う。最初の段階では、学生は主体的に動かないが、授業が進むにつれて、自ら動く学生が増えたと思う。

３）高い要求を求めつつも、出来るだけ学生と時間を共有し、アドバイスなどの支援を続けた点。多くの学生が後輩に、「逃げないで、本気に取り組むと達成感が得られる」とアドバイスしていた点をみると、「粘り強くやり抜く力」の大切さを学んでくれたと思う。アンジェラ・ダックワースによると、GRIT（やり抜く力）は、成功、幸福感、健康と大きく関わり、ハーバード大学の入学やマイクロソフトの採用などでも重要視されたという。そのやり抜く力を外側から伸ばすためには、「子どもに厳しい要求をしながらも、支援を惜しまない育て方」が大切だという（2016, アンジェラ・ダックワース , p.282）。この点は今後も続けていきたいと思う。

一方、授業を終えて少なくとも４つの課題も明確になった。

１）目標の立て方や使い方の指導に工夫が必要であること。

学生が目標を立ってっぱなしで、学生たちが準備している間、うまく意識をさせることができなかったと思う。今後の指導では、より良い目標の立て方、また目標をゴールとして意識できるような指導を工夫してみたい。

２）PDCA の指導に工夫が必要であること。

ミーティングノートを毎回提出させたりしたが、特に忙しいと学生がおざなりに書くようになっていた。PDCA をチーム発表のときにだけ導入するのは難しいのかもしれない。春学期のフレッシュマン・セミナーで、個人レベルで日常的に PDCA を回すなどの経験をすると、チーム発表になったときにスムーズにいくのではないか。現在、フレッシュマン・セミナーで PDCA を導入して、試行錯誤中である。

３）教員やメンバーからのフィードバックの受け方指導に工夫が必要であること。

教員や他者からのフィードバックを求めず自分たちの考えだけで進める学生が多かった。具体的に、他者のフィードバックの受け取り方を明示的に指導する必要があるのかもしれない。

４）チームでの話し合いの仕方についての指導

チームで準備を進める上で、メンバー間の意思疎通がうまくいかない、学生のやる気に差がある、学生が話し合いの進め方に戸惑っている、という状況が散見された。指導のヒントとして、仲間同士が互いに相手に興味を持って質問するように指導することは、意志疎通の改善につながるという感触を持った。

今後は以上のような課題にひとつひとつ向き合いながら、学生が成長できる授業を目指していきたいと思う。

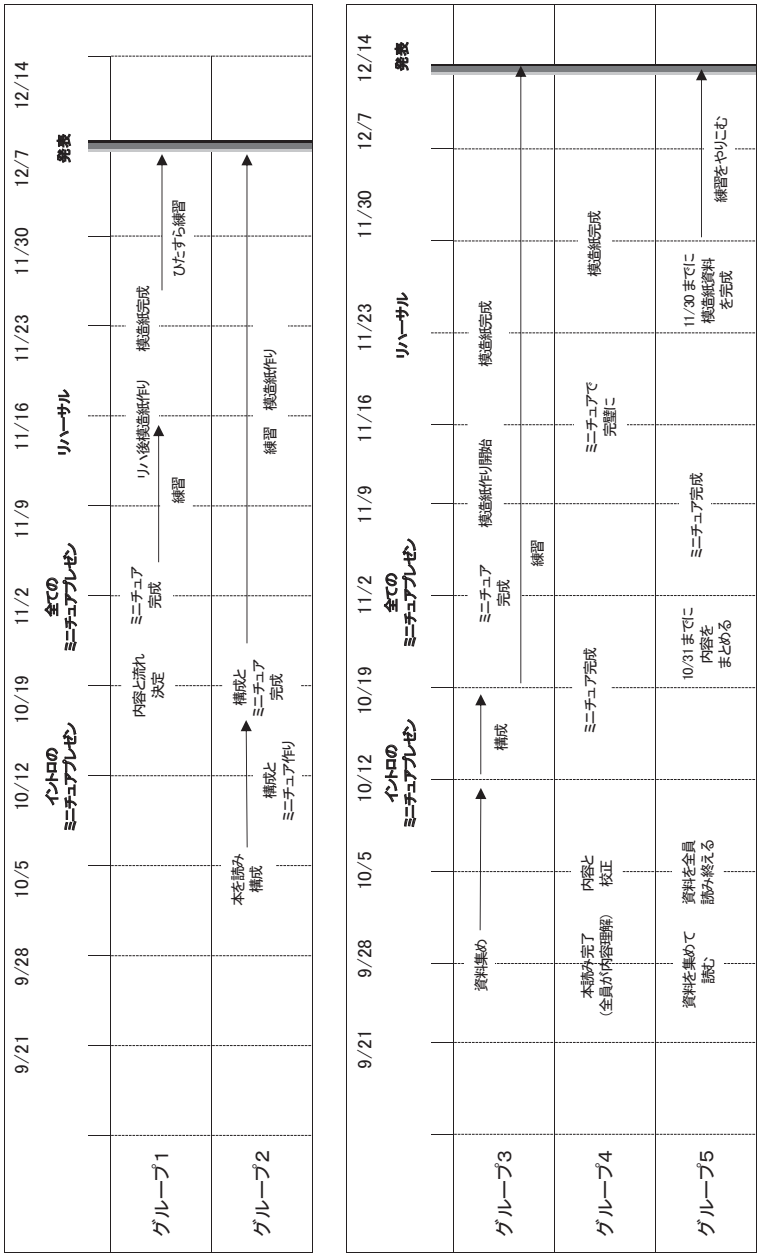
参考文献

新井紀子『AI vs 教科書が読めない子供たち』東洋経済新報社、2018年。

アンジェラ・ダックワース『GRITやり抜く力』ダイヤモンド社、2016年。

中山芳一『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍、2018年。

付録資料：　各グループの計画表　（2018 年 9 月 28 日時点）



（ひき・くるみ　英語国際学部教授）